

ある映画の話

作・小佐部明広

【登場人物】

1 劇場

僕
僕の兄
僕の女
僕の男友達
僕の元同級生（仁美）
青年

劇場に入ると、なにか、これから演劇が上演される、というよりは、これからの練習でも始まるのだろうか、という声や物音が聞こえてくる。舞台上で出演者たちが軽く声を出したり体を動かしたりしているのが見えてくる。舞台の端には、これからのシーンで使われるであろう、机、イス、ベッド、などが寄せられているのが見える。喫茶店を感じる道具もあれば、誰かの家の中のような道具もあり、はっきりとこの舞台がどの場所である設定なのか判断としない。むしろそれは、これから行われることは事実ではなく、あくまで芝居であり、演技であるということを主張しているようにも感じられる。

もうすぐで開演することを示すアナウンスが流れる。そのアナウンスは特にユーモアもなく、観客を歓迎しているわけでもなく、儀礼的な、むしろ観客にやや緊張感を与えるようなアナウンスである。

開演時刻になったのだろうか、出演者と思われる男が他の出演者に声をかけ始める。

青年はしばらく観客を眺めている。観客が自分を見ている、ということを眺めているようだ。

青年 僕は、観客であるみなさんのことが大好きです。映画も、舞台も、観客がいなければ、映画にも舞台にもなりませんから。だ

からこれからは、僕たちと、みなさんの共同作業が必要です。両手を出してください。(観客が両手を出したのを確認して)この手を(手を叩く)こうやって叩きます。せーの。

観客は両手を叩く。叩かなければしつこく繰り返していい。

青年 そうです。では何回も叩いてみましょう。せーの。

観客は拍手する。青年は笑顔をつくる。

青年 今回の観客は頭がいいですね。それじゃあもうひとつ。(鈴を取り出して)僕がこの鈴を(鈴を2回鳴らす)2回鳴らします。したらみなさんは目をつむります。いきます。

青年は鈴を2回鳴らす。観客は目をつむる。要求に応じない観客もいるが、青年は無視する。

青年 みなさん頭がいいですね。次は僕が、(鈴を3回鳴らす)鈴を3回鳴らします。したらみなさんは目を開きます。いきます。

青年は鈴を3回鳴らす。観客は目を開く。

青年 賢いですね。もう一度いきましよう。2回鳴らしたら目をつむり、3回鳴らしたら目を開きます。いきます。

青年が鈴を2回鳴らすと観客は目をつむり、3回鳴らすと目を

開く。それを3度繰り返す。観客が目をつむっている途中で青年は、「今とても面白い顔をしています。勝手に目を開けないでください。」と言う。観客は笑うかもしれないが、やはり青年はそんなこととはどうでもいいという顔である。

青年 はい、それでいいです。今日の観客はかなり賢いです。もちろん、こんなこと誰でもできますけどね。

青年は舞台の手前の脇の、やや高くなっている椅子に座る。

青年 今日は、ある映画の話します。僕が今サークルで作っている簡単な映画です。その映画の主人公の名前は「僕」です。当然彼には名前がありますが。その名前は重要ではないので役名は「僕」です。彼が「僕」です。手を叩いてあげてください。

「僕」を演じる出演者が前に出てきており、青年とともに観客の拍手を受ける。

青年 で、(端にいる他の出演者たちを示して)彼らもこの映画の登場人物です。(他の出演者も軽く頭を下げる)今日は、僕が今作っている映画を、彼らに協力してもらって、ここでみなさんに見ていただきたいと思えます。みなさんが映画館に入ると、観客は数えられるほどしかいないので、それは人気のない映画だということがわかります。みなさんはつまらないイスに座ってつまらないCMを見ることになりました。明かりが落ちて波の音が聞こえ、上映が始まったことがわかります。

2 海

青年が鈴を2回鳴らすと、客席を照らしていた明かりはなくなる。波の音がきこえてくる。鈴の音が3回聞こえ、目を開くと、僕と女が立っている。

僕は砂浜に立ちながら海を眺めていた。横では女がやはり海を眺めている。

女 なーんか、気分出ないね。

女は僕に同意を求めるように僕の方を見ていたが、僕は無視をした。

女 なんかき、曇ってるときの海ってき、違うよね、なんか。

僕は、あの日の海も曇っていた、ということ思い出していた。

女 なんか怒ってる？

僕 (無視をしている)

女 ごめん。

僕 なんのごめん？

女 なんか悪いことしたかなって。

遠くから声が聞こえる。僕と同じ大学の男友達の声だった。

男友達の声 おーい、入れよ！ かもん！ かもん！ うおお！

彼は少し大きな波に飲まれ一度は消えたものの、またすぐに出てきたようだ。

女 はしやぎすぎなんだよ！

男友達の声 (聞こえなくて) え？

女 はしやぎすぎ！

男友達の声 うおお！

彼はまた波に飲まれた。

僕 なあ、向こうでさ、青姦するのはどうかな。

女は一瞬たじろいだが、まんざら嫌でもないという感じだった。

女 (少し考えたあと冗談ぽく) ムリムリ。

僕 今想像しただろ？ 興奮すると思うんだよ。彼氏が一人で海

で遊んでる中、その友達とセックスするんだよ。波の音を聞きながら。外で。

女 ダメ。

僕 最高だと思っよ。

女 だって……ダメだよ。

僕は明らかに気分を害されたふりをした。彼女は、どうしていいかわからないまま黙っていたので面白かった。

僕 子供の頃、海で溺れたことがあってさ、その日も曇ってたな。

左足をつつたんだよ。そのときの俺は、なにが起こったかわからなかった。つるつて経験がそのとき初めてだったからさ。俺はど

うしようもなく沈んでいった。音がきこえないんだよ、水の中は。見えるのは水と、水面にうすく映っている光だけでさ。俺は、死ぬ、と思ったけど、悪くないと思ったよ。苦しい、と思ったけど、それがむしろ嬉しかったような気がするな。でも、俺は助けられただよ、レスキューに。俺の兄貴は母さんに殴られた。「わざと目を離れたでしょ。弟が嫌いだから。あんたが溺れて死ねばよかったのに。」とか、そんなことを言いながら。兄貴は今でもそのこと謝ってきたりするけど、本当は、あのまま溺れて死ねばよかったと思ってるんだ。俺が目障りだったから。

僕は、彼女がなんて声をかければいいのか困るだろうと思ったし、実際彼女は困っていた。

女 大変だったんだね……。

僕は、彼女のその陳腐な言葉に、思わずこらえながらも笑ってしまった。女の恋人がなにか大声をあげながら、海から戻ってきた。

男友達 おい、なんで来ねえんだよ。寂しいじゃねえかよ。

女 は？ 水着持ってきてないし。

男友達 なんだだよ。海に水着必須だろ。リア充っぽいことしようぜ。うえーい、リア充！

僕 リア充うえーい。

青年 そこはもつと大学生のノリで。

僕 リア充うえーい！！

男友達 ……リア充うえーい！

僕 うえーい！！

僕は思ったよりも大声を出してしまい、一瞬そのことに彼も戸惑ったようだがすぐに僕のノリに合わせてきた。

男友達 (女の肩を抱き寄せて) こうやってさ、

女 (離れて) や冷たい。

男友達 こうやって彼女と、友達と三人で海に行く。これぞリア充。

僕 うえーいリア充。

男友達 バーベキューでもしちゃう？

女 何一つ持っていないじゃん。

僕 さっきこいつとセックスしようって話してたんだよ。

彼女はなにが起こったかわからない顔で僕を見ていたが、彼は動じていないふりをしていた。

男友達 マジで、サンピーじゃんサンピー。三人でラブホ行っちゃ

う？ ラブホって三人で入れんの？

僕 入れなかったらこいつ(女)置いて二人で行こうぜ。

男友達 マジかお前そういうパターンかよ。俺も目覚めちゃうかな？

僕 そういやこの前あいつとやったよ。名前忘れちゃったけど、お前と一緒にナンパして、カラオケに行った、あのブスな方。(女に) あ、ナンパしたっつってもお前と付き合う前だからあんまり怒んなよ。こいつお前と付き合う前はやばかったんだよ。いけそうな女はかまわずやるからさ。でき、嫌なんだけど、よかつたら

その女呼ぼうか。そしたら四人でホテル行ってさ、二人しか入れなかったら、お前からやって、俺はその女とやるからさ。

男は一瞬戸惑ったようだが、彼の言うノリというやつでなんとかすることにしようだった。

男友達 それやべえよマジで。リア充うえーい！

僕 リア充うえーい！

鈴の音が2回きこえる。電話の着信音が聞こえる。しばらくして鈴の音が3回きこえる。

3 ラブホテル

僕は面倒だと思いつつながら女とセックスをした後、面倒だと思いつつながら服を着ていた。電話が鳴ったのはそのときだった。

兄 あのと、あ、うん、俺。

僕 うん。

兄 あのと、なんか、久しぶりだなんて思ってたよ。

僕 うん。

兄 なんつーかあれだよな、久しぶりだよな。

僕 うん。

兄はもう話題がなくなったのか、少し黙った。

兄 あのと、あれ覚えてるかな、俺もこの前ふと思いついたんだけどさ、うちに納戸ってあったら、あの小さな物置部屋みたいなやつだよ。そこに、お前と一緒に閉じ込められたこと思い出してさ。本当に真っ暗でさ、母さんが外からガムテープかなんか貼って、本当に閉じ込められてさ。お前はパニックになってさ。いつつもおとなしいお前がパニックになったんだよ。俺はきつとこの暗さがいけないと思ってるよ、なにかないか手探りで探したんだよ。そしたら、ラジオペンチがあつてさ、俺はそれでドアに穴を開けたんだよ。ガンガン叩いてさ。小さな穴から光がもれてきて、そしたらお前は少し落ち着いたんだよ。とりあえずなんとかあった、俺はそう思ったんだよ。

僕は、彼の話に興味に相槌をうっていた。彼女はベッドの上で、電話がすぐに終わらないことを不愉快に思いつつ、なにかそこに居づらいうような様子だったが、僕は無視した。

兄 そしたら、母さんがさ、外からガムテープかなにかで、その穴を塞いだんだよ。また真っ暗になって、お前はパニックになったんだよ。しばらくして母さんはやつとドアを開けてさ。お前が怒られたのはその一回だけだったよな。なんで怒られたのかはよく覚えてないけど。思い返せば、お前、母さんに殴られたこと一回も無いんだもんな。すげえよ。単純に。お前は俺を見て育ったからさ、何をすれば怒られないのかがわかるんだよ。ずるいよな。ただ生まれた順番が違うだけで、こども違うのかって思ったよ。ああ、ごめん、違うな、別にこんな話がしたかったわけじゃないんだ。昔の話だし。

僕 覚えてないな、そんなこと。

兄 ああそうか。ならいいんだ、別に昔のことだし。それに、俺も今は幸せだからさ。

彼女は爪を噛みながらつまらなそうにスマートフォン画面を見ていた。僕はそれが気に入らなかつたので、彼女のスマートフォンを自分のズボンのポケットにしまった。彼女はやることを失い、ベッドの上で居づらさそうに横になったり、天井をみたりしていた。

兄 そう、俺は幸せなんだよ。そう、その話をしたくてさ。でも、ごめんな、俺要領悪いから、どういいう流れでどういいう話を始めて

いいかわかんなくてさ。俺……できたんだよ、彼女。彼女だよ。そう。それを言いたくてさ。どこから話せばいいかな。俺、話すの下手だから。電話をしたんだよ。そしたらあいつが来たんだ。まあ、もちろんそれが仕事だからさ、来るのは当たり前なんだけどさ。正直、彼女が来たとき、ハズレだなんて思ったんだよ。お前が見たら、ブスって言うようなやつだよ。でもさ、よく見ると可愛げがあるんだよ。話だつてうまいし。笑うときに歯を出して笑うんだよ。それに、なんていうかな。彼女さ、俺のこと、うまいつていつてくれたんだよ。今までで最高に相性がいいつて言ってくれたんだよ。それで、まあ、何回かそういうことがあったんだよ。俺もさ、いろんな本とか買ってさ、それはつまり、彼女をつくるための方法とか、そういう本だよ。彼女の喜ぶことを考えてさ、いろんなことをやってみたんだよ。それで、俺は告白をしたんだよ。俺が養うから、お前はもうこの仕事をやめろつて。そしたら、付き合えたんだよ。信じられなかったよ。俺に彼女ができたんだよ。お前に見せたらブスつていうに決まってるから写真は見せないけどさ、でも本当は可愛いんだよ。本当は可愛いし、俺は、その可愛さがわかる心を持っているんだなって思ったんだよ。それから、俺は変わったよ。養うために仕事も頑張ったよ。それでさ、店長になったんだよ。俺が、店長だよ。考えられないだろ。店長つて言っても雇われ店長だけだよ。居酒屋つて大変なんだよ。深夜までやってるからさ。昼から深夜までぶつ通しだよ。そう、今日は久々の休みで、それで電話しようつて思ったんだけど。まあなんていうか、もちろん仕事は大変だけどさ、家に帰ったらさ、彼女がいるんだよ。そしたらさ、その大変さは大したことがないんだよ。だから、俺は今幸せなんだよ。そう、だ

から、俺は幸せだったつていうことが、お前に言いたかったんだよ。

僕は兄の話を聞きながら、わざと彼女の頭をなでていた。いつもはセックスのあとにそんなことはしないのでやはり彼女は驚いていた。その後、彼女は僕の体に身を寄せていた。

僕 うん、兄貴が幸せそうだよかったよ。

兄 まあ、お前はもつと可愛い彼女がいるんだろうし、俺より幸せなんだろうけどさ。でも、誰かのために何かをするのつて、素晴らしいことなんだよ。そう、素晴らしいことなんだよ。それも、伝えたかったことなんだよ。

僕 俺、今ラブホにいるんだけどさ、ベッドの上でさ、可愛い彼女抱いてんだよ。声、きかせようか。こいつ変態だから、そういうの興奮するんだよ。声、聞かせようか。

兄 (少し黙ってから笑つて) やめてくれよ。今、せつかく幸せなんだからさ、邪魔しないでくれよ。

僕 そう、じゃ、お幸せに。

兄 ああ、うん。

僕は電話を切った。彼女は自分がそのような変態ではないという非難の目で僕を見ていたが、僕はいい彼氏を演じてみようと思つた。僕が抱き寄せると彼女は機嫌を直したようだった。

女 ねえ、今日のあれ。

僕 うん。

女　なんか、嫌なこととか、あった？

僕　なにが？

女　映画のとき、急に大声出して。

僕　ああ、なにもないよ。

女　みんな見てたよ。いいシーンだったのに……気に入らなかった？

青年　そこ、感動したってことにしようか。

僕　感動したよ。

青年　もっと感動しようか。

僕　（さっきより感動している感じで）感動したよ。俺、サークルで、簡単な映画とか撮ることあって、やっぱり映画には厳しいんだけどさ、あの映画はよかったよ。お前も泣いてたもんな。「キミの全てが好きだ」ってセリフあっただろう。あれはいいセリフだったよ。うん、すごくいいセリフだった。よくあんなセリフかけるなって思ったよ。でも、まあ手放していいとは言えなかったかな。よくないところもあったよ。途中でヒロインが突然死ぬシーンがあるだろ。あれはリアリティがないな。伏線が無いんだよ。なにか彼女の死を予感させるものがないとき。俺も映画つくるときに考えるけどさ、やっぱり伏線が大事なんだよ。全ての重要な行動には伏線が必要なんだよ。伏線がないとき、不自然に見えるんだよ。それにさ、あのヒロインの女さ、確かに可愛いかもしれないけど、魅力は感じなかったな。あの女より、お前の方がずっと魅力あるよ。

僕は、確かに可愛いかもしれないけど、から始まるその映画のセリフを思い出し、自然な形で言ってみたら女はどうするだろうか

と試してみたが、女はそれが映画で言っていたセリフだとは気づかず、感動して泣きそうになっていた。

女　そんなに言うならさ、私と付き合ってくれればいいじゃん……。

僕　それはダメなんだよ。理由は言えないけど、でもいつか、お前と付き合えるときが来ると思うから、そのときまで待つてほしいんだ。

付き合えない理由は特になかったが、僕は決まってそう言うことにしていた。

女　大声出したのはなんだったの？

僕は、意味ありげに黙ってみることにした。彼女はその沈黙の意味をはかりながら、喋り続けた。

女　それだけじゃなくて、急に電車で前に座ってる人の頭叩いたりさ。赤信号渡つて車止めさせたりさ。危ないよ。もし死んじゃったら、私、耐えられないよ。

僕は普通の人と同じように、そのような行動を思いつくのだが、普通の人間がそれを実行しないと違って、僕はそれを実行してみることになっていた。僕はまた意味ありげに少し黙りながら真剣な表情を作ってみた。

僕 俺、わかんないんだよ。自分がなにを思ってるのかさ。俺嫌なんだよ。急にわけわかんないことしちゃってさ。なあ、俺はどうすればいいのかな。(わざと無理に微笑んで)ごめん、こんなこと言っちゃって。でも、どうしようもなくてさ。

彼女はやはり心配そうに僕をみて、手を握った。

女 大丈夫、きっと大丈夫だよ。

僕はその言葉を予想通りでつまらなく思い、急に演技をするのがバカバカしくなり、寝転がった。彼女は、僕の様子を見てなにかを恐れていた。

女 ごめん、私にかした……？

僕は、彼女の首を絞めることを思いついた。きっと今そうすれば彼女は驚いて苦しむだろうと思ったので、次彼女がなにか言葉を発したら、僕は彼女の首をしめることにした。

女 ねえ？

僕は自分で作ったルールの通り、突然彼女の首をしめてみた。

女 え、ちよつと、え、なに、え、うそ、苦しいんだけど、なに、やめて、やだ、やだ、

彼女は僕の腕を必死に外そうとするが、僕の腕はずれなかった。もつと力を込めて、もうしばらく締め続ければ、彼女は死ぬかもしれないと思った。今ここで彼女が死ぬ。それは悪くないように思えたが、僕の力は緩んでいた。彼女は僕の腕を外し、まるで本当に死にそうだったみたいに真剣に咳込んでいたので、面白かった。彼女はおびえながら僕を見ていたので、僕は笑いをこらえきれないまま喋った。

僕 冗談でしょ冗談。なにその顔、それ、死にそうみたいな顔して、なんだそれ。なんだよそれ。

僕は寝転んでなお笑い続けたが、彼女はわけがわからないという顔で呆然と僕を見ていた気がした。僕が彼女に手を伸ばすと、彼女の体は自然と身構えていた。そのまま僕は彼女の頭をなで、見つめ合い、抱き寄せた。僕は、彼女ともう一度セックスすることにした。

鈴の音が2回聞こえる。

青年の声 僕は街に出かけた。手当たり次第に女に声をかけ、一緒に酒を飲み、セックスすることを思いついたからだ。僕が3人の女に立て続けに断られ次の女を探していたとき、肩をたたかれた。振り返ると知らない女がいたが、すぐに中学校の時の同級生だと気づいた。確か仁美という名前だった。僕は、わざとらしく久しぶりと言い、居酒屋に誘おうとしたが、彼女はずっと困ったように笑っているだけだった。彼女はバッグからメモ帳を

取り出して何か書き、僕に見せた。
仁美 「耳が、聞こえません。」

鈴の音が3回聞こえる。

4 僕の家

僕と仁美が、家に入ってきている。

僕 まあ、入れよ、狭いけど。座って。

僕は、身振り手振りをしながら、なるべく彼女にわかりやすいように喋った。白いワンピースを着ていた仁美は部屋の床に座った。

僕 酒のむ？

彼女は耳が聞こえないので、困ったように笑っているしかなかった。僕は酒を取り出して、ジェスチャーを交えながら、もう一度酒を飲むかきいた。彼女は首を振って断った。

僕 なんで？

仁美は、なにかのジェスチャーをした。僕は、吐いてしまう、体が受け付けない、という意味だと理解した。僕は仁美を見て少し微笑んで曖昧な返事をして、酒をしまった。僕は仁美とセックスすることを思いついていたが、どのようにセックスの流れにもっていかばいいかわからなかった。僕はワンピースから出ている仁美の足や、仁美の胸元を見ていた。

僕 ごめん、酒しなくて、なんかお菓子でも買ってくればよかったですな。

と言いつ切る前に、仁美は僕の手を、両手で握った。僕が仁美を見ると、仁美は僕の顔をまっすぐ見ていた。そういえば彼女はこういう人間だった。人の中に何か素晴らしいものを見つけ、それをまっすぐな目で見つめてくる女だった。僕は、何かを恐れ彼女から目をそらした。彼女はまだ手を握っていて、僕の顔を覗き込むように、あのまっすぐな目で僕を見ようとしてきた。僕はなんとか彼女と目を合わせようとしたが、やはり恐ろしくなって目を離してしまふのだった。彼女は手を離し、なにか手の形をつくってきた。

仁美　へ会えて、嬉しい。▽

少しして、それが手話であることがわかったが、僕にはその内容がわからなかった。仁美は小さなメモ帳を取り出し、そこに何か書き始めた。

青年　「会えて、嬉しい。」

彼女はもう一度同じ手話を示した。そして更にもう一度繰り返した。僕も彼女に誘われるように、同じ手話を見よう見まねでやってみた。

僕　（手話をしながら）会えて、嬉しい。

彼女は無邪気な笑顔を僕に返した。そしてまた僕の手を両手で握り、その僕の手を自分の額につけた。やはり彼女はこういう無邪

気でまっすぐな人間だったと、また思い出した。

僕　ごめんやっぱり俺だけでも酒飲もうかな。うん、酒が飲みたいな、俺は。仁美が酒飲めないのは残念だよ。せっかくもう酒飲める年齢なのにさ。（酒を注ぐ）ま、酒の味とかはよくわかんないけど、やっぱり酒はいいもんだと思うよ。（酒を飲む）うん、うまいな。酒飲めないなんてかわいそうだよ。ちよつとくらい飲めるんじゃないかな。どう？　飲んでみる？

僕は酒を差し出したが、彼女は笑顔で断った。僕は何か話し続けようかと思つたが、それは意味のないことのように思えたので、もう一口酒を飲んだきり黙ることになった。彼女はそんな僕をずっと笑顔で見ている。

僕　俺さ、前はさ、女の裸に異常に興味があつたんだよ。まあ、思春期だよな。中学校のときなんかやばくてさ、女子のスカートの中からパンツが見えると、俺はそれだけで勃つたんだよ。でもそのときの俺はさ、それはいけないことだと思つたんだよ。周りにエロ本とか持つてた奴もいたけどさ、俺は見なかつたよ。高二のとき、俺はセックスつていう概念を知つてさ、まあ周りに比べて遅かつたのかもしれないけど、俺も両親もそういうものを遠ざけてきたから仕方なかつたんだよ。その頃の俺は成績もよかつたし運動もできたけど、そんなのは意味がないって思つてたんだよ。そんなんじゃないかと、女の裸こそ、俺の人生にとってなにか意味があるものだと思つてたんだよ。彼女ができてさ、まあ少し太つてたし美人じゃなかつたけどさ。そいつの話はつまらな

かったけど、裸を想像すると苦にはならなかったよ。俺は彼女とセックスをすることになったんだよ。俺は背中を向けて、そいつは服を脱いでさ。俺は目をつむっている間、俺の人生が変わる、俺の人生が変わるって頭の中でつぶやいてたな。それで、自分が生きていることを感じていたんだよ。俺が目を開けてそいつの裸を見るとさ、なんか、意味がわからなかったんだよ。なんかわからぬけど、気持ち悪かったんだよ。そして、そこでなにかが終わったような気がしたんだよ。俺は、期待しすぎたのかもしれないな。そいつとはその日に別れたんだよ。

僕が笑いながら話していたので、彼女も笑いながら聞いていた。僕が予想していた通り、彼女は僕の様子から、僕が楽しい話をしていっているように思っていた。僕は酒を飲んだ。

僕 それで、なんかどうでもよくなったよ。今の俺は、特に意味もなくその辺のやつとセックスするような男なんだよ。お前はさ、俺の初恋相手だったけど、そんなのはどうでもいいんだよ。なあ、聞いてんのか？ お前は俺の初恋相手だったんだよ。なあ、ほんとは聞こえてんだろ？ 俺は仁美とセックスをしたいんだよ。どうせお前も、その辺の男とやりまくってんだろ。なあ、わかっただよ。お前、聞こえないふりしてるだけなんだろ？ なあ？ わかったら、とつとと服脱いでやらせろよ。なあ？

彼女は、僕の様子が変わっていくのを見て、困ったような笑顔をしていた。僕はこれ以上なにか話しても無駄だと思ひ彼女を押し倒そうとしたが、彼女の顔をみてやめた。僕は酒を飲んだ。彼女は、

僕を見て、なにかの手話をした。

仁美 へ大好き。▽

僕 なんだよ……なんなのか全然わかんねえんだよ。気持ち悪いからやめろよ。

仁美はメモ帳になにかを書く。そこには「大好き」と書かれていた。

青年 「大好き。」

彼女はそのカードを示し、その言葉に対応する手話を示した。それを何度か繰り返した。

仁美 へ私、あなたが、大好き。▽

僕はなにか意味のわからないことをいいながら、前に倒れそうになると、自分が泣きそうであることに気づいた。彼女は僕の両手を握り、僕の額に自分の額をつけた。とても長い時間、ふたりはそのまま動かなかったような気がした。彼女は僕の目をつむらせた。

鈴の音が2回きこえる。

しばらくして、唇と唇が離れる音が聞こえる。

鈴の音が3回きこえる。

「僕」は舞台から消えていて、代わりに青年が舞台にいる。二人はしばらく黙っている。

仁美　へ大好き。▽

青年　へ大好き。▽

青年が仁美を見ると、仁美も僕を見ており、僕は、仁美と一緒に、なんとなく笑う。

音楽。暗転。

5 僕の家

僕（青年）は、自分が随分と普通の人間になっているような気がした。大学も春休みになったので、僕は長い時間仁美と過ごすことができた。僕は、遠くの床をぼんやり眺めながらベッドの脇に座り、仁美はベッドで小説を読んでいた。

青年　なんか、昨日はごめん。

彼女は恐らく僕が喋っていることに気づいていないので、そのまま小説を読んでいた。

青年　やっぱり、ダメなんだ。どうしてだろう。仁美以外の人とはこんなことないのに。違うんだよ。きつとなにかを恐れているんだね、俺は。それとも、体が衰えてるのかな。バイアグラでも飲めばうまくいくかな、なんて。

彼女は途中で僕がなにかを話しているの気づいたのか、本を置いて僕の様子を見ていた。彼女は後ろから僕を抱きしめ、僕の頭をなでた。僕も彼女の頭をなでた。

青年　うん、焦ることはないよ。そうだよ。次はうまくいくよ。

少しして僕はビデオカメラを手に撮り、彼女に向けた。彼女は恥ずかしくてカメラから顔をそむけた。僕はしつこくカメラを彼女の顔に向けたが、彼女もしつこく顔をそむけた。やがて彼女は観

念して顔をそむけることをやめた。

青年 今度作る映画はさ、仁美がヒロインで撮りたいな。耳の聞こえない女の子がさ、中学時代の同級生と偶然出会うんだよ。そいつは、まあ頭のおかしい男んだけどさ、その男は彼女のおかけで変わっていくんだよ。二人は、一緒におしゃれなパスタを食べたりさ、美術館に行ったりするんだよ。男はさ、案外そういう典型的なありふれた幸せみたいなのが、好きなんだよ。そう、うん、ただそれだけの映画だよ。大してドラマチックじゃないけど、でもそういう映画もありんじゃないかと思うんだよ。俺と仁美の二人だけでさ、そういう映画を撮るんだよ。どこにも発表しないでさ。だからその作品を観られるのは俺たちだけなんだよ。そういう映画をさ、俺は作りたいな。

僕はカメラで撮影しながら、彼女と顔を合わせた。そしてそのままキスしようとしたが、そこで電話の音が鳴った。電話は母親からだった。

青年 はい、もしもし母さん？

そう言ったとき僕はしばらく黙ることになった。それは母親がずっと喋っているからだだったが、僕は母の喋っていることの意味がよくわからなかった。僕は、なにか曖昧な返事をしていたような気がする。

僕が面会室に入ると、透明な板で仕切られた向こう側に兄がい

た。兄の顔は、今までよりかなり落ち着いているようにみえたが、相変わらずいつもの苦笑いのような表情は少し残っていた。

兄 おう。

青年 うん。

兄 ああ、なんか、こうやってお前の顔見るの、久しぶりだな。お前、正月もこつちに帰ってこないし、なんか、でも変わんねえな。青年 うん。

兄 お前のその、うんっていうの怖いんだよ。やめてくれないか。いや、今は怖いというより、なんかイライラするんだよ。

僕は兄の話には全て「うん」で相槌を打つように決めていたのだが、もう黙っていることにすることにした。

兄 でも、なんだか、拘置所っていうのも悪くはないよ。余計なものもないし、自分と向き合えるっていうか、意外と快適なんだよ。

僕は「うん」と言ってしまったので、兄は僕をにらんだ。

兄 なんか俺、こういう事件ってさ、拳銃とか包丁とか、そういうものを使うもんだと思ってたんだけど、蹴る、うん、俺は蹴ったんだよ。蹴るだけで人を殺すことができるって、なんだか、今思えば意外だなんて思ったよ。それに、もうひとつびっくりしたことがあつてさ。弁護士の話じゃ、俺はせいぜい懲役7、8年らしいんだよ。意外だったよ、俺は死刑になるかもしれないと思ってたからさ。弁護士は執行猶予もつけてくれようと頑張ってるんだ

けど、まあ、俺はどっちでもいいよ。でも、やっぱり俺は刑務所に入ってみたいかな。そんな体験なかなかできないしき。けっこう楽しみにしてるんだよ。今まで寝る時間削って働き続けてたけど、刑務所の生活は規則正しいんだよ。9時には寝れるんだよ。天国だよな。俺、刑務所でもけっこううまくやっていけると思うんだよ。

僕は「うん」と言わなかった。

兄 ああ、俺がしたいのはそういう話じゃなくてさ。ごめんな、俺話すの下手だからさ。つまり、順を追って話すんだけどさ、あいつがさ、あいつつてのは俺の彼女だよ、あのクソブスがさ、まだやってやがったんだよ。まだ客とつてさ、その辺の得体のしれない奴らに股開いてたんだよ。クソブスのくせにさ。それで俺はさ、そのクソブスと、なんか言い合ったんだな。そういうケンカはよくあることだったし、別に大したことはないんだよ。でもそのクソブスがさ、俺に言いやがったんだよ。俺とのセックスで気持ち良かったことなんか一度もないって。あれは演技してただけなんだって。俺はセックスが下手くそで、ただ都合がいいから一緒にいてやっただけだって。だから、俺はあのクソブスを蹴ったんだよ。でも、それもよくあることなんだよ。クソブスがなんか言っつて、俺が一発蹴って。で、俺が謝って、セックスして仲直りするんだよ。今考えると頭悪いけどさ。俺つてその程度の人間なんだよ。でもそのときは違ってたんだよ。なんか、もう一発蹴ってみようって思ったんだよ。もう一発蹴ってみたら、あのクソブス、すごく意外そうな顔をするんだよ。その顔がなんか面白くてさ、

もう一回蹴ったんだよ。あのクソブス、蹴るたびになんか変な音を出すんだよ。それも面白くてさ、あと一回、あと一回と思っつて、なんかやめられなくなつてさ。もうやめないとヤバイかもしれないと思いつながら、でもやめられなかったんだよ。ふとそのクソブスの顔を見たらさ、気持ち悪いんだよ。クソブスなんだから気持ち悪いのは当たり前なんだけどさ、そういうことじゃなくて、本当に気持ち悪かったんだよ。それで一瞬俺はひるんだんだよ。あ、今なら蹴るのをやめられるって思ったんだよ。これ以上やったら死ぬかもしれないし。でも、その、死ぬっていうのが、実はすごいことなんじゃないかと思つてさ。実は俺はまだ蹴るのをやめるべきじゃないんじゃないかって思つたんだよ。だから、蹴るのをやめるかどうか、もう少し蹴りながら考えてみることにしたんだよ。それで俺は蹴り続けたんだけど、だんだん冷や汗が止まらなくなつてきてさ、蹴るのをやめなきゃいけないって思いが強くなつてきたんだけど、俺は勇気をもつて蹴り続けることにしたんだよ。蹴り続けた先に、何かがあると思つたんだよ。クソブスは死ぬかもしれないけど、それでもいいと思つたよ。それでさ、気づいたらさ、あいつはもう動かなくなつてたんだよ。……俺は、体が震えてさ、怒りか、悲しみか、それとも恐れかな、そういうった感情に包まれてさ、罪悪感みたいなものに押しつぶされてさ、立つことも難しくなつてさ、狂つて暴れ回つて叫び続けてさ……そうなると思つてたんだよ。でも違つたんだよ。全然違うんだ。俺は特別な人間だったんだよ。もつと違う、希望、みたいなものがさ、頭に浮かんだんだよ。だってそうだろ？俺は人を殺すことができたんだよ。今まで何もできなかった俺がさ、人を殺すことはできたんだよ。そうだよ、俺はやればできる

んだよ。それで俺さ、夢思い出しちゃってさ。小さいころからさ、俺は画家になりたいって思ってたんだよ。幼稚園のとき先生に褒められてさ。自分が画家なんかになれるわけないと思ってたし、最近ではそんなことも忘れてたけどさ。でも違うんだよ。今からでもやればできるんだよ。刑務所の生活も楽しみだけさ、刑務所を出てからはもっと楽しみなんだよ。俺、人生でやりたいことが山ほどあるんだよ。どんどん思い出してきたんだよ。俺がやりたいと思ってたことをさ。生きてるうちに全部やりきれるか心配だよ。俺は気づいたんだよ。人生って素晴らしいものなんだよ。こんなにもいろんなことができるなんてさ、素晴らしいことなんだよ。昔から、俺はなににもできなくて、お前はなんでもできたんだよ。でもな、俺は人を殺せたんだよ。お前にはできない。ほとんどの人間にはできない。ところが俺にはできたんだよ。そう、俺にはできたんだよ。なあ、俺は狂ってるのかな。どう思う？狂ってるのかもしれないよな。でも、狂えるって、それはすごい才能だと思うんだよ。狂う才能。狂いきれれば、人生つてもものすごくシンプルなんだよ。つまり、やっぱりお前よりも、俺の方が特別な人間だったってことなんだよ。

僕は兄の話をききながら自分の筋肉が震えていることに気づいた。僕は自分を守るために、何かを言わなければいけないかった。

青年　ほんとクズだなお前は。

兄　（僕を見据えている）

青年　特別な人間？　違うね。お前は頭がおかしいだけだよ。お前の考えはおかしいんだよ。世の中そんなにうまくいかないんだ

よ。画家になる？　なれるわけがないね。画家をバカにするなよ。お前はどうせ刑務所でいじめられるんだ。そうだよ。高校のときいじめられてたみたいに、刑務所でもいじめられるんだよ。いや違うよ。死刑だよ。お前は死刑だ。だって人を殺したんだから。懲役7、8年？　バカ言うなよ。死刑だよ、お前は死刑になるんだよ。

兄　それだよ。

僕は、その兄の言葉の意味がわからなかった。

兄　お前は自分の心が乱されそうになると、そうやって言葉で壁を作るんだよ。お前つてもつともらしいこと言うからさ、頭の悪い俺は、なんとなく納得するしかなかったんだよ。でも俺はわかったんだよ。お前のその言葉は、ただの壁なんだよ。お前つて昔から言葉を並べるのはうまかったんだよ。それで、たまに奇妙な行動をとって、周りから底の知れない奴だと思われたりするんだよ。俺はお前のこと得体のしれない奴だと思ってた。でも今ならわかるよ。教えてやろうか。お前の得体のしれない行動には、実は何の原因もないし、なんの意味もないんだよ。当たり前だろ？　そう、つまりお前は、今このタイミングでこれをすれば「得体の知れない奴」だと思われそうだし、ということをやっていただけだったんだよ。それがわかったとき、俺は笑ったよ。たったその程度のことだったのだから。お前のやっつてることには、なんの意味もなかったのだから。

青年　くだらないね。ただの妄想だよ。頭の悪い奴は何の根拠もない貧弱な思い付きを勝手に思いこむんだ。お前はとつとと死刑

になつて、毎朝毎朝刑務官の足音をききながら死の恐怖におびえてればいいんだ。

兄 ほら、言葉の壁だ。意味なんかひとつもない。

僕は、面会室を出て自分の部屋に戻つた。仁美は相変わらず小説を読んでいたが、僕の様子を見るなり、僕を抱きしめた。僕は、仁美の胸の中で震えていた。兄はまだ僕に語り続けていた。

兄 本当は自分がいかにつまらない人間か知られるのを恐れて、お前はただ「底の知れない奴」を演じているだけなんだよ。

青年 違う。

兄 くだらないね。俺はもうなにも演じる必要がなくなったから、本当に生きているんだよ。そう、お前の届かないところまで、俺は辿り着いたんだよ。

青年 黙れ。

兄 俺が本当の人間だとしたら、結局、お前は人間になりきれなかった出来損ないなんだよ。

仁美は僕の頭をなでていた。

青年 なあ、おかしいじゃないか。なんなんだよあいつは。もっと、苦しんでなくちゃおかしいじゃないか。もっと、悩んでなくちゃおかしいじゃないか。ふつう、そうだろ。人を殺したら、ふつうそうだろ。俺が、演じている？ なにを？ 演じてるのか俺は？なあ？ 俺の今のこれも、演技なのか？ 俺は演技なんかしてないよ。違うな、叫ばないとダメだな。「俺は演技なんかしてな

いだろ！！」

僕は、やはり自分は演技をしているのかもしれないと思った。彼女は、とにかく僕を抱きしめ、僕を落ち着かせようとしていた。

青年 なあ、仁美もさ、俺を捨てるんだろ。俺が今までその辺の女たちを捨てたみたいに、俺を捨てるんだろ。なあ、そうだろ？ お前は楽しんでるんだ。俺がいい彼氏を演じてる途中で、いきなり首を絞めたりして楽しんでたみたいなのに、お前も耳が聞こえない演技をして、俺を混乱させて楽しんでるんだろ？ そうか、そういうことだよ、当たり前だよ。初恋の相手に再会したら急に耳が聞こえなくなつてたなんて、それは演技に決まつてるよ。なんで気づかなかつたんだ。そうだ、セックスがうまくいかないのだからってそうだ。お前が、うまくいかないように仕向けてたんだよ。そうか、うん、全部わかつた。俺には全部わかつたんだよバカが。

僕が仁美の顔をみると、彼女は相変わらず、あのまっすぐとした目で僕を心から心配しているように見えた。これ以上ここにいられないと思い、外に出ようとした。後ろでなにか声が聞こえた。彼女が言葉にならない声を出していた。僕は立ち止まり、彼女は僕を後から抱きしめた。しばらくして彼女は僕を座らせ、僕をしかるようにメモ帳に「どこに行くの？」書いた。

青年 ……どこにも、行かないよ。

と言っても彼女には伝わらないので、僕はノートに「どこにも、

行かないよ。」と書いた。僕が彼女に視線をやると、彼女は笑っていた。彼女は「どこにも」「行かないよ」を順番に指でさし、それぞれに対応する手話を、僕に見せた。僕は最初、彼女がなにをしているのかわからなかったが、すぐに、僕に手話を教えようとしているのだとわかった。

青年 (手話とともに) どこにも、行かないよ。

仁美は笑った。

仁美 へどこに、行くの？

青年 (仁美の手話と同時に) 「どこに、行くの？」……(手話とともに) どこにも、行かないよ。

仁美はもう一度笑った。僕は、ノートに「どこにも、行けないよ。」と書いて、これは手話で何といるのか、と尋ねた。仁美は、その言葉に対応するであろう手話を、僕に示した。

青年 (手話とともに) どこにも、行けないよ。

仁美はまた無邪気に笑う。

仁美 へどこに、行くの？

青年 (仁美の手話と同時に) 「どこに、行くの？」……(手話とともに) どこにも、行けないよ。

仁美は笑いながら拍手をする。

仁美 へ大好き。✓

青年 へ……大好き。✓

それから僕たちは静かな部屋で黙っていた。お互いに目を見たりしながら。その空間は、僕にとってとてもいいもののように思えた。

青年 こっち戻ってくんの、いつって言ってたっけ？

僕、ノートに「戻ってくるのいつだっけ？」と書く。彼女は「2日」と書いた。

青年 おばあちゃんちだっけ。俺、ずんだ餅好きなんだよ。確かずんだの名産地でしょ。買ってきてほしいな。

僕は、ノートに「ずんだたべたい。」と書く。彼女は笑って、両手の親指を立てる。そして、彼女は僕に目をつむるように示し、僕は目をつむる。仁美は僕にキスをしようとする。

鈴の音が2回聞こえる。

6 僕の家

鈴の音が3回聞こえる。

僕は、ぼんやりと自分の家でテレビの映像を見ていた。

青年 妙な揺れを感じた後、テレビをつけると映画をやっていた。どのテレビ局に合わせても同じ映画をやっており、その映画は三日三晩放送されていた。映画が好きな僕は、もっとカメラアングルを工夫し、CGの使い方を派手にした方がいいと思いい、ずいぶん淡々と作られていたその映画は、変に不気味だった。昔、ふたつのビルに飛行機がぶつかると映画を観たときも同じようなことを思ったのを思い出した。普段のテレビは、親が子供を殺したり、家が燃えたりする映画を淡々と1、2分ずつくらい放送していたはずだが、その映画は延々同じようなシーンを繰り返していた。大きな水の壁が街を淡々と襲っていた。彼女は帰ってくるはずの日になっても僕の部屋には来なかったし、電話にも出なかった。あの映画となにか関係があるのかと思っただ、僕にはわからなかった。僕は、彼女はきつと祖母の家で楽しくずんだ餅を食べているのだと想像し、自分もその隣でずんだ餅を食べられたら楽しいのと思った。奇妙なことに、春休みが終わっても、彼女は帰ってこなかったし、電話にも出なかった。

鈴の音が2回聞こえる。

7 コーヒーショップ

鈴の音が3回聞こえる。

僕は特に面白みのないコーヒーショップの椅子に座り、特に何も感じない机をぼんやりと見ていた。机の上には既に買ってきたカップが置いてある。彼がやってきて、僕に特に意味のない挨拶をしてきたので、僕は彼に合わせて、その特に意味のない挨拶を返した。

男友達 お前のそれ、なに？

僕 ん？ ああ、そうでもないよ。

僕は、自分の言ったことが彼への返答になっていないような気がした。

男友達 その飲み物、なに？

僕 ああ、ふつうのやつだよ。

男友達 あそう、俺ヨーグルトなんちゃらだよ、しゃれてるだろ。

男友達はそう言って笑っていたので、僕は少し遅れて大袈裟に笑った。

男友達 いや、そんなに笑わなくていいよ。

僕 ん？ ああ。

男友達 なんか、大変みたいだよな、放射能がどうか。

僕 ん？ ああ、あの映画な。なんか、変だよな。
男友達 ？ いや、映画の話じゃなくて。

僕は既に男友達の言葉は聞いていなかった。

男友達 なんか、最近講義来てないみたいだし、どうしたのかなって思ってた。メールも返信ないし、電話も出ないし。だから、今日お前から返信来て、ちよっとびっくりしたよ。

僕 ああ、まあ、リアリテイないよな、それは。

男友達 ？

僕 リアリテイ？ ああそうか、なにか伏線とか、あったらよかったですよ、急に返信したら、そうだよな。

男友達 ……まあその、なんでお前を呼び出したのかつつうと、うん、その話をするわ。あのさ、お前、俺の彼女と、なんかやってる？

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。
た。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

2017年に、今までやってきた自分の団体の内部に、自分がやりたいことをやる舞台芸術グループをつくった。『ある映画の話』は、そのグループでの第1作目になる。自分が型にはまっていくような気がして、自分が平均化されていっているような気がして、もっと自分が情熱を傾けられるものを作りたいという思いでこの作品を書いた。観客が実際の上演を観てもわからないようなト書きが多く書かれ、長いセリフがたくさん出てくるけれど、それでいいと思った。実際に舞台でやってみると、自分のイメージよりもつまらないものになる可能性は十分にありうるから、それは稽古をしながら調整していかねばならないと思う。

この作品を書き終わって、僕にはきつと作中の「僕」と同じように、逸脱したいという思いがあるのかもしれないと思った。しかし僕は実際の生活で、例えば人を殺したり、映画館で大声を上げたり、力を込めて人の首を絞めたりするという逸脱をすることができないから、このように本を書き、舞台作品を作っているのかもしれないと思った。いや、そもそも舞台をつくりたいなどと思っていることと自体、既に普通から逸脱しているのかもしれないが。

このあとがきを書いているのはまだ稽古が始まっていない段階だから、これが果たしてどのように舞台上がっていくのかはわからない。観客がわかってくれないことを恐れるあまり、よくある作品のようになるのだけはどうしても避けたい。それは結局、逸脱を恐れ平均化していくことになってしまうから。もしかすると僕ももう少し歳を取ると、平均化されていくのも悪くないと思うようになるのかもしれないが、20代のうちは、そこにあらがっ

ていこうと思っている。なので、この作品はもしかすると、「なんだかわからない舞台」になるかもしれない。「意味がわからない」と言われるかもしれないし、「奇をてらって作っただけだ」とか言われるかもしれないが、それはこのような作品だから仕方ないことだと思う。不道徳で公序良俗に反している内容だと言われるかもしれないので、パンフレットに注意書きくらいは入れておいた方がいいかもしれない。

『ある映画の話』は青年の語りから始まる。そして鈴の音により観客は「目を閉じる」「目を開く」という動作を強いられることになる。しかも舞台上の人物は一切観客と仲良くなるという気がない。舞台の人物と観客の関係を変えることができないかという思いでこの方法がとられた。観客は舞台の場面転換などに「目を閉じる」という動作で参加しなければならず、それが観客の心理にどんな影響をあたえるかを試してみたかった。おそらく、ただ暗転するのと、観客が自ら目をつむるのは、なにかが違う気がする。ほとんどのシーンが、「僕」ともうひとりの会話である。これはほとんどのシーンを「僕」の視点から書いているのであり、感覚的には一人称小説に近くなると思う。つまり観客は僕に注目することになる。しかし、おそらく僕に感情移入する観客はほとんどいないだろうと思う。そこもまた、どういう結果になるのが楽しみだ。ともかくこれは、実験であり挑戦であるのかもしれない。

2017年8月16日 小佐部明広

《上演記録》

proto Paspport#01『ある映画の話』

【キャスト】

僕 ————— 高橋寿樹（クラアク芸術堂）
僕の兄 ————— 中村雷太
僕の女 ————— 仁木わかな
僕の男友達 ————— 若月篤（クラアク芸術堂）
僕の元同級生（仁美） ————— 遠山くるみ
青年 ————— 上松遼平（カンガルーパンチ）

【スタッフ】

舞台美術 高橋詳幸（アクトコール株式会社）
舞台デザイン 川崎舞
照明 高橋正和
音響 小佐部明広
衣装 松島みなみ
小道具 佐藤智子
宣伝美術 小佐部明広
制作 後藤夏実

【日程】 2017年12月1日（金） 20時

2日（土） 14時／19時

3日（日） 12時／16時

【会場】 扇谷記念スタジオシアターZOO

【料金】 2,000円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

《『ある映画の話』の上演について》

「前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

c1ark.artcompany@gmail.com

2017年11月28日 第1刷制作

2017年12月1日 第2刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。

クラアク芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>